



1980
2



南川新活目錄

源りの編

ちま林新説

伊丹



物語の辨

言義の極

并々林十あの山和泉式部の墓

源活

一勾の意

按て化教勾は 并々林おやくの勾

長き趣向を廻す勾法

あそん編

之勾法論

平生座

軍乃勾編

観お

前勾の意

并々林女房の附の文考の詳

栢子

地子勾

百七

目錄

古語の扱 并木村其同の附句

柀こを句法

凡情

尚多きを促す句法

女之と井古語を引句

けき放す詞

おのより産教句 并木路むれ佛の附句

言人の名を扱句法

おののみそ名福 并其角者其乃引句

さおのこの福 他平きれ句

模柀を轉句法 才三

おを柀おせ居の附句 并木路るお治

條川の端

涼袋 著

凡附合の依りをおもひの中や黄ゆも帯れく人
 舞雲一雨を乞ひ牛馬月をえく喘く時を
 夏子苗を抜く根柀柀す人ハ翔川高蕉門の六叔を
 内に油柀のれをを付ものハ福の糸のひれち
 なる子孫子法笑乃世の中を志しハ柀百韻
 志実をおれつて収支考ハ阿誰の治乃屈入
 鳴くまの理論子をわり涼免也之足猿の柀子
 又おれあのおれおれおれおれおれおれおれ
 乙由りハ翁の秘歎をも喜ひ次何てたしき戯論

圓やいむも恒砂此屑とおもひたし一甲一山の綿
よぬさうのかげ合せハ二十年前のゆはなを
誰そあそむ橋をたふと常乃ゆおしくいひて
万代の人た日用ありて安よ高く眼を着おれを今
の能遊をまぬれ人よと云

麦村の説

麦村常子た右ふ志めは附てし地き与ハ九一うは附ぬ
白ハ粒とぬるくはぬれハ中子附与は論ハ七名も
明ハ評もふく只日用乃其のあつを核よ轉
愛子保ハあつれハ一も一もを熱向ハ一も一も一も

あつれハ一も一もを熱向ハ一も一も一も
なつあへうは前与の化ハあつれハ一も一も一も
物乃本作をえりハあつれハ一も一も一も
常もあそむれハ一も一も一も
百ハ意味をまハ一も一も一も
は聖や附ても熱き与ハあつれハ一も一も一も
おハ一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も
ハ古山ハ瓢を裂破セハ一も一も一も一も一も一も
梅路ハ一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も
附ハ一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も

附遠くありとあるは... 又古寺に裡の附合
古くは之をうらむに... 子正よし
又病を... 言ふも... 言ふも...

言ふも... 言ふも...

春林を別者として... 集りて... 詠居る...

つとむる...

と附るものあり... 梅の傍より... 春の横風...

一室の山に... 悔れわや... 中し...

賀の希用南方... けい... かのう...

方く... 方く...

あはれ何う... 方く...

一むく詰つゝ向用いづるはけりき一字の扱ありて
和泉式部乃墓やきしりよあし式部ハ墓し之阿ハ
語路もあしすなる意はたはくの種趣をゆる
空掌を指しおろく父ありきしりてきりハ
けりハせむ初ハ乃附きおろてハあしりたつりなるを
片虎の傍よりおろしりてハ式部の墓ありあし
きしりなるともけりきしりおろなるを春林ハよ示はを
なるハ一志も貴美の下ハあし吾子の骨右をけり
きしりなるともけり

かさねる春林の字を問ひしり式部の墓ありあし

やずハ名えれおすころ伊勢系まよ日記
よりハ一かきハ式部ハ墓とまよ感懐をいめて
けりハすハ女の女なりし春東ハ乃諡ハあしり
けりハすハあしりなるきしりハあしりなるハ
しりハあしりなるきしりハあしりなるハ

死活

すしりなるせんとの死活のまよハなるハしりハ
かちハあつる強ハ死漢乃名をきしりハあしりハ
しりハあしりハあしりハあしりハあしりハ
しりハあしりハあしりハあしりハあしりハ
しりハあしりハあしりハあしりハあしりハ

活するありあはれいそはもて活するあり安ま林乃
論せぬ夕一

人乃田ノ拍子子の川ニ括り

ちれ死匂り安ま活鯨の魂を入んま拍子子の川ニ
括あふれとす一ちれいそあはれ一ちれいそを括せ

あ一いそあはれ一あはれ

伯母子似と後乃顔一おひま

ちれいそいひつめいそいそを括せ一附ちりいそを括

ちれいそいそいそいそを括せ一他いそいそいそを括

ちれいそいそいそいそを括せ一ちれいそいそいそを括

ちれいそいそいそいそを括せ

一句のき

ちれいそいそいそいそを括せ一ちれいそいそいそを括

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

ちれいそいそいそいそを括せ

桃やまぼろしの百一十回帳

昔田舎のひやうくうひやうく

伏見安井を乃はくうひやうく
はひ金れ子身ていろくひやうく

随ハ笛子染川志つうれ

ま雨子おの名所一起きく

詩人ゆゑハ高橋をあやかおひおん
一まおハ定ぬらうおう

まかに油く快くうれ

雨子朝の節くきりく申く

夕アやまうきまぬ人あま

う場の海く風ハ吹く

蠅追きけは志の録

志れきけ乃焼く録うり
乃まらうきり市日りんこや

あまのやみ溜くえきく月の影

兎を利ハハれくち

玉ハ山子控裏をあうなけ
いろは況中髪頃髪をや

持真名りく其高き亭を定くす

えい山くも水くおき

あまの古用ハまはきく
えい山ハあひす

投けすよ一おも可き陞院

大字の字下屋るる色

大抵一休の二乃字よりきく一乃一は
字のまゝ一乃一は

日月は餘七隣ノあはれ一乃一

宵中子ひやう一乃一

あつれいよさひり一乃一
客乃あつれいよさひり

接く他れ句法

長き趣向を云布やくも是もいひきくあはれ云々果ハ
十七字のみ一乃一くつおもしひえぬくつをむるも一乃一
そ子ユ夫を付く句他を接く云々系を以て先結す
これをつゆを他れつゆ一乃一あやまき句法なれハ或
は損一乃一講ももしれ一乃一けたをを學ひゆるす一乃一つ也

儂夫は後のよく申用の言系は多う人押け法ハ
俳諧をかきくはあち乃詞客も是をつくすハのあ
澹暈の詩一乃一但来の解を入るるを同くせ
やえ一乃一さやま材の附句の中はおもすう一乃一誦あき
あまのれくきくす先ハ乃家乃中乃折志ハふま一乃一
めハ乃一乃一こ一乃一せ一乃一とさき一乃一に親仁のあはれ一乃一
二乃一はるよすくを他れ一乃一

赤い踊りをト一乃一

城より押ぬすも他れ句法を云はれむあはれハ朝
くも里の晴れハもや昼あのをえあけ道者乃

版あ〜くのきゝあう〜

久きせ〜川く戻らと付

長^キ越向を廻る夕法

越向ハ二勺の百子立ち〜るやの物語を大あ〜とよ
え論乃と〜廻さ〜川中〜夕よとよるや〜
おこを〜おあつまよ夕伝をぬき〜

一あ〜〜通れハ終乃音はう禁

おさ〜をや〜〜盗人々判

何を付〜も附有きあうなを何を何〜はは輝
清浄地の水音耳は志み〜おあ〜あ〜あ〜あ〜

う〜川乃お流あり山の本華しやふ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜波のおこやもき〜じぬすみと〜あ〜あ〜あ〜
お〜あ〜の里〜^{ヒラキキ}痲病の〜き〜あ〜あ〜あ〜
お〜あ〜き〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
目せ^キあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
他者た〜ん〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

周をち〜あ〜や〜あ〜あ〜

か〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

南文下

十五

やうりの才幅をせうつてりあへ

福多くろくもの見にくくひり

おいら吉水院あへ

お白の口所らまふよなつてくおのあへり乃こも附
つさをも替不おもーろくくひりやえぬま方野の白居の
器もひくくおん道者子霊宮をえまると附
されやかめまよハ村上陣義宮の口ち刀もくつハなうり
ーハなと律義一片の人よひひくくーはへてくくひり
のるをもまきま子信吉水院の古びるをもよ不波乃
まわりよすやへぬれな交解をもるー

本巻底

附白の常子あれりもを他りま一句も亦す造他なる

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

あへりもまを批灯て吸ふ

南文下

十六

かゝるすハ小東の御工名おや一よて自らけうしけおし
一むう一すみきしれ附与よ

皇正一八二二廿八日

ひくおきハ様よいさ乃大よく

おれ階舞のおうしみしーくげうよあしあやまら申
ちうけ梅路う泣笑よ

かすすのまゝあハありあゑ

休ヤてあゝ驚うあくいよ何いんて

世ノ実よはすアしれ他者ハ休勢のおあよああ
ト冷してなやいおしひ志つてくさめよ他

ま孫よのかうりハ灯う消くわ

糸柁ハあつのお體入れく又て

下のみ文字れ御もるよ

あやまゝすといは乃悪名

敗軍うもちをつうヤて喰かて居

あせしハ二候もつけまをかつふ一喜よのよおる
あー只虚りてあろろまおあり突よ志りて
あうまよのあり号を用う。虚実自在や
つふあ

観相

今の所より言はちやけり降りて
にくふも申をきくも

又

判りぬええ乃店をえてまわり

水仙さけけ片もふやう

次の句に祝おの人神を化王にせおあり

ゆをあらゝのよ早し女のめ

けりてもねも穢くさえ

よくまわりてかもしうきとめうけ
お場よあけおひ
まつおへう

あうのあま

附うすけり汲承うをまのり
えへくはあけりやと一上もよ
浦小り何れもやむもあけり
あうの模様を人志れす
まをれは化者よりうき
とつふり物

方丈に鮫も喰はれ宗をよて

やけり次子

畑のうさぎを志まぬに甘藷

とけし一折はうらもね志はくくして傍より京道の
うさぎをすくくしや又敷よ其志は付くもいづくあしや
つよのあり路筋はくはくは家句をねまのつくとく

魚くしの還俗は何の宗旨よ

志は志を扱を志をねま志もあうればくをく
一折し願を願し一折あり
一折は志柳有して

うね柳鳥懐子よ拂ふ萩の中

といふこ布因り

めあはしいは志

や付てのう前句は他者懐子よ拂ふと志く
附らるもちふ何しとておれ句を志く

盆よ来て志暮引きく

いせよて志考を別者と志れ今よ志暮の附く

志のふりし志を志ふ

志席よか申し中を志く

一折は志句を申し一折は志考つつに長を掛

く伊勢の志より志をばりて志く
志折ね一折は志句を申し一折は志考

一きししはすはるも一すてに点考長よ及び何や
不をもすししはるやと意一くも一にすき
答へはは二句宜しけぬよ長をくけり附はあやれ
やあしんかゆい首中をさし一付てや夫のしんぬ
ととにぶのふのしをさしむすもす一す中
ろかすすきぶの事をさすも服をけやあやる
おのれやあしんかゆい首中をさし一付て
ととにぶのふのしをさしむすもす一す中
挿子

挿子

秋暮中休入年四よ波を羽も
めは得ぬや吟し善哉毎
たは附句よ挿子もあしんかゆい首中をさし一付て
をくけし

地の句

たの地の句やをさし一付て
と一事を撰るよととにぶのふのしをさしむすもす
他はあはしる句は口上なやあしんかゆい首中をさし一付て

つらき清波や平流の境を去りて滑然たりたり
およ一ふありき。くはけりてけ地のうけ中。

芥子の花は先おありてなほさぬ

中まいか申ひまへはけりてあり。

奪七一なまき。むくも。

かくのそくあひふ一は地のうけ尻おもひり。

ゆき。い角力れをおよたまてふえ。あちやせを

古語の扱

あぬ。かく。ま。あ。ま。を。お。め。あ。り。て。附。の。下。は。お。

ゆ。み。を。入。れ。お。つ。ま。し。て。一。れ。と。は。ま。く。滑。然。乃

あ。ち。を。志。し。て。孫。を。下。の。詩。を。以。す。や。よ。て。真。お。
け。ま。よ。や。け。く。ま。村。の。附。う。れ。才。子

畑あひまきさく門くありてはけ

清きく白くもあ々の春一風

うけ雍陶う村園門巷もお似處々春風松鼓巷とを人
を訪き。田家のり。まきをあうけ摸板子えせ。あり
さ。ハ。や。て。識。者。の。他。誤。子。入。つ。て。友。傳。國。語。を。い。い。合。え
執。筆。の。難。き。と。い。や。お。う。

冷ああも新柄子志のうせぬ

宰予て昼を採ちる。兄才子

又

おかしき所をほめてしめかきし

問答まてくる所ホー和思一摩

いつれも書き乃模札と志願一

おむむ法

ワさくも系ハ莫をあり道のをも

ホちくも旅ありけいて来

おれくのうまハ解を八も及れ一今てハホちくの

在所を旅して他国てありけいてきるもあ

来ルやなり

志願の名も書りしちまユク一

賣ルやや旅し子も法

おれくも人買子賣りてやあるのホちあなりすも

いつれもなすのれもる一

問答

問答ハ一まありきれハ同系れとまかりハあやあ

連あもはなすものあれハウホの寂をさるや

解くのうびくもやハ

一解たましくハ白の

一ウまも万の意味あはる一

昔の茶釜よりあふれり

紫井尺あやこけりもまた

又

弁あよ木のあふりを振るる

けりけりやけりけりの四角

又

秋ひやききりあておあふり

筆筆よ鮫鮫しかくきりあふり

又

道の志きりよむすけりき

又ておけいおあふりききり

かあきぬい能法の子せりきり

ああきを隠す法

ああきのおおききりきりきり

のあよもあふりけりけりけり

障子の窓より目と画とあ

ああきあふりあふりあふり

ああき

ああきあふりあふりあふり

ああきあふりあふりあふり

あはれよー 姫よりの音信と入る大の以てのよき事
あはれよー 人さへ

女のご許さ清とふ事くは扱のあはれよー さまを
乃くよーいひこし

西へ来たよめくちくもすいぢなゆふ

あやに交るよめくちくもすいぢなゆふ

しづさをかす詞

あはれよー 詞をさもくしよー 下はあはれよー ひとひ
ちむよあもふく化あり 姫よ 節 能治の直はよめり
あはれよー 人のあはれよー ちむよあもふく化あり

しよー 田を刈てふ類おもひあしよー ちむよあもふく化あり
夕化よ木の敷もく人さへー ちむよあもふく化あり
小松よあおひもー 一頃乃あうをゆつしよー ちむよあもふく化あり
化者なもれいふもー ちむよあもふく化あり
ちむよあもふく化あり 入るよめくちくもすいぢなゆふ
いひせせり 執事あるなあはれよー ちむよあもふく化あり
ちむよあもふく化あり

又ちうをさしよー 枝王の交はれ

あはれよー ちむよあもふく化あり
あはれよー ちむよあもふく化あり
あはれよー ちむよあもふく化あり

判ハ筆ハあれハ筆氣ニク居

と云ふおう一わおとひひせき一何の事をいひせんと
すうぬえんより一お急とておれおれとておの事をいふ
さう中尾の巴静々お山の事をいふ一何ま村の事をい
おゆひ先一をいひておつてお七五あつて上のお文字
おうり一はおも一うやおはつておれおれとておれ
万歳のともおとハおのり

おうより一おれおれ

おうのこゆをいひておれおれおれおれおれおれ
上のおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

やまを工史す一

ちのれおのなつとみ畑よ宿ねい

并藤六の韓よめくはり

又

天物よはち中あつておとさつて

使者ひと通清盡くひ

おう一みの論

おう一みの道具のあつていふ言もふ乃ちうよあゝい

きんじのいふるよ入るんやあゝ一たをよや一

いひたしんあゝいのおう一たもいもあゝいやあゝい

水うめよあゝいあゝい人のあゝいの値病と又裸よてまおゝい

言下よあゝいみを生れい何れの後笑ハ只あゝい

韓よあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

突あり又も枕乃塵を拂ふやハ帯よ一てあゝいあゝい

蟻を拂ふて起あゝいハ吹せすはうて越向とあゝい

其う角々魚尾琴の附のうら子尻をあゝいする鳥帽子

かゝるぬとりふうハ神服の嚴重もあゝいあゝい

すうハやんやあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

野鄙もあゝいあゝい一尻はあゝいあゝいあゝいあゝい

あゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝいあゝい

魚也故人さゆも足むを論よしおらやとのあひむ
やう佐のまづるをきかぬしほよお家よあうみ乃
一あうをいこ

あうけく魚かまのぬす人

くくひれそかくさる観音

蔀乃痛も医者子をもつね敷

捨せくもたかく婁くの痘瘡

まの腹中ハ蚌乃用ん

よけ家一待々そつ川と

おらてくれと鑑着と人

詩笑の句佐もおおく一毛も理論あはる
乃根向よあふうちやせむ才あうれ後笑ハかくハ
ハヤサのすあうく自然のおうみあふすやハハむ

さあ一々の論

他流よさひくすくぬまハ調膳よ香のおりすれ
まよいウも一されやさあ一をらぬちう困寂
のさよれおあつるも一又雨寂よあさあさあさ
只のすまの寂と見れはさひ一ハ他流の神あう
詩笑も慢急もいつれさあ一さああうはく
おれう才よおすく趨向をまよの句よ

定乃自憐し心平ぬいふつま

横川かし般舟のそく秋乃凡

かく陶とんおうれ定乃自憐とつるををのうさひ
近いをさんおしそく八系を足おろし定ハよりれや
之上山よりかまくと山くえいハ念をのしめとる墨を
なうせれはさうの湖水乃あるそよ一動し志りもあ乃
オありけ者のあしくいさふちうしくにす中とんり
又あくお本のまふハ所ハあつらう

若うしくもこいひ上 膳

二句ぬく希用ハ化まで彼ハそりまけハあすうを

切り

化くハあう

廿秋の下もふをかすいあつま

鷗子おいけとるを事くつ

又

志くおれお先とけ子つハお

黒木賣るるハハ紫垣ア似る

いつれ七一巻の模極なる

模極を辨す教法

附の辨不ハ句化より一ハ化ハ趣向の辨不よりす定子

一段のよつまをかく

よのつまをかく

傾城乃あづれを中てまめを来り

是より月本の同派をなすは其の養生との神を志す
きれあり

才之

服より之四句は軍ひとつふにあはれおとせと此様格
志すかひあるは二巻をまよしよはれおのすくは極
くは明し様子古人もけははれをつくせは今も賢
すある子あはれと

布の火を二るつよかきま

と布ふさうよはるの二羽織を

枯木うとおもふね子帆を

冷くと股のしげに取らめ

あはれにまよはれようかありよ

抱して才のなすはすくは繁す

中子おうみも言葉よあはれひもも只お

眼の文と志す

まなねおき居の附

續新百韻の序子もせ

くゝものもすゝかゝすのむゝゝ

昼にありれよえ中におせお

いゝかゝの巻ハ諸家おのゝ漫真一てをを振ひ
と重きをおす孝林ひやうり晏然とて今や月ハ
夕なまゝとあり似たりとあゝ人くもおもひはし
うはおせ居乃附合よ物ハく満座口をけくむか
たりーやその故梅踏よいつりおハかの句はめよ
あーるハ昼ハ化しとすれおせおとあゝあはれ
おしーろき一佐おくふつれを曲るよなはれ時を
一候志ハめて倍をよるあはれ一彦のあゝく

曲るの句をゆゑはれハまハ一エ又あはれやあゝは
なるよはれはりー梅梅路々閑居る一灯をかこみ
おはれ乃るもつすれやハ推神何そをやく
梅踏をくーお一れや伴附句乃月ををゆゑる
間然志のゝたれやーあゝ一候ハかゝおとあゝや

南北新話 大尾

東塾 孝超 校書

百七下

四一

跋

ある林や人の所を往くは涼しきやうに
たかやうにやうにわたりて我幻く茶子か壺
をさうくま言なぬ海一今をいれすおき
示はすはなうくは茶のす付ありしき
黙然や一ちおりのわあ茶のす付ありし
多一南方の人連句よりかろくわの人の
よもやまの茶のす付ありし茶のす付ありし
いよ茶のす付ありし茶のす付ありし
たよ茶のす付ありし茶のす付ありし

上りあ〜〜〜やうに東武茶のす付ありし
懸一欠きよ茶のす付ありし茶のす付ありし
えん清子酒のす付ありし茶のす付ありし

和お茶のす付ありし主人



大坂書林鹿島献可堂藏版目錄

心すい修め久く町南へ
指原忠義清

七支子詩集

小本 一冊

同 掌故

三冊

同 註解

二冊

同 國字解

二冊

同 七律解

二冊

詩法授幼抄

小本 一冊

斧介集

詩歌書全 一冊

詩對類語

同全 一冊

詩家法語

熟事全 一冊

發蒙書東式

三冊

傷寒五法

五冊

茶道七事式

二冊

町見辨疑

西川氏 五冊

三界一心記

小本 一冊

將棊指覽抄

小本 二冊

神代古訓抄

無

真景 伊勢宮名所志 六冊

繪本廿四孝 一冊

盆石圖式 三冊

茶功適 抄本一冊

農家心得草 抄本一冊

狂歌芳分船 一冊

大坂書林

和歌相火桶 室書 二冊

新元法 其持著 月漢西 一冊

茶村の身 其持著 月漢西 一冊

むせ城新元法 其持著 月漢西 二冊

同拾巻 其持著 月漢西 二冊

其角難儀系 其持著 月漢西 二冊

同又元系 其持著 月漢西 四冊

後元系 其持著 月漢西 四冊

俳諧小づち 小本 一冊

同来かり 其持著 月漢西 一冊

同四季歌 其持著 月漢西 二冊

同拾巻 其持著 月漢西 一冊

同小休 其持著 月漢西 一冊

同秘傳抄 其持著 月漢西 一冊

瓢水発句集 其持著 月漢西 二冊

其持著 其持著 月漢西 二冊

二柳菴句集 其持著 月漢西 二冊

西賢集 其持著 月漢西 二冊

俳諧分歌 其持著 月漢西 六冊

教子 其持著 月漢西 一冊

其持著 其持著 月漢西 一冊

毛吹系 其持著 月漢西 一冊

片寄 其持著 月漢西 一冊

同二歌 其持著 月漢西 一冊

